



# 最近の住吉歴史資料館の活動について（フィールド レポート1）

内田，雅夫

---

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 12:103-112

(Issue Date)

2020-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012606>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012606>



## Field <sup>1</sup> Reports

### 最近の住吉歴史資料館の活動について

内田 雅夫

#### 住吉神社大祭日に思う事

今日は五月五日、神戸市東灘区住吉の本住吉神社だんじり祭の日である。コロナ禍で令和二年のだんじり引き出しは中止となった。阪神淡路大震災以来の中止であり、我々住吉の人間には、心の中になにか白いばやけたものがかすむ虚脱感があり、この歳になっても、である。

東灘区全体が沸き立つだんじり巡行であるが、実は、順調に行われて来たわけではない。テレビの普及など娯楽の変化、交通事情の悪化により住吉では昭和三十六年（一九六一）から昭和四十九年（一九七四）まで、だんじりは引き出せず、各地区の「だんじり小屋」でほこりをかぶっていた。

昭和三十五年（一九六〇）は引き出しが中止となる前年である。筆者六年生。だんじりの前綱を引いていた。みやいり宮入するため神社に向けて、太鼓、鐘のお囃子も賑やかに「御旅筋」おたびすじを上るだんじり。ボクが引いているから動いているのだと思うと一層力がある。

世話人のおっちゃんたち、庭山のおっさん、藤田のハルさん、井筒のオンジャンがいう「子供ら、もつと引かんかいやあ、だんじり、止まってまうどおっ。」と。だんじりの屋根では横田のにいちやんがはたきを振っている。目尻に紅を差し、じんべに猿を担いでいる。猿は落下封じの赤い布きれのおまじないだ。

翌年から引き出しが十四年間杜絶える。筆者の中一から始まり会社勤めを始めたころまでにあたる。毎年大祭当日は、御旅筋の、あのだんじりの雄姿がちらつきお囃子が耳から離

れない。なんともいえない悔しさを覚えている。

引けないゆえに、傷んでくるだんじり。破れかけている芝居絵の豪華な刺繍幕、ツクゴマ（車輪）の独特の調製法、提灯や雪洞の飾りつけ方法、だんじり囃子の保存伝承、そして、狭い地道を縦横に引くテクニクなど消えてしまうのか。焦りばかりがあった。

昭和五十年（一九七五）に引き出しはともかくも復活する。引き出しを続ければ、なんとか将来へつなげることが出来ると思ったのはこのとき。三十四年後、筆者が住吉歴史資料館のお世話をするようになった原点である。

## 住吉歴史資料館

J R住吉駅西側すぐの本住吉神社に住吉歴史資料館がある。

平成十三年（二〇〇一）、震災復興と住吉神社鎮座千八百年記念で財団法人住吉学園が神主家の屋敷を再建したが、その一部を展示室、会議室、並びに座敷（二間十六畳敷）を持つ資料館として開館し、空襲を奇蹟的に免れた神社並びに神主家伝来の資料を公開した。

平成二十一年（二〇〇九）には資料の収集、研究体制が加

わった。すなわち、筆者を含め現在四名の事業推進委員がお世話をする体制となった。

これは当時の住吉学園本田隆志理事長の措置であり、同時に神戸大学大学院人文学研究科と連携覚書を結び木曜日毎、研究員の先生の全般指導を仰いでいる。

扱うテーマは、住吉に関わる歴史的、文化的、そして防災の為のあらゆることである。

だんじり、宮神事、神社・村方資料、住吉宮町・郡家遺跡、天下の豪商「灘住吉の吉田家」、「水車百輛白一万個」の先進醸造地帯、御影石のこと、明治七年（一八七四）開業の官設鉄道住吉駅、「日本一の富豪村——住吉村」、生活協同組合コープこうべ、渦森台の大開発「山、海へいく」、そして、阪神大水害、大震災などである。

地域の神戸市立住吉小学校、渦が森小学校、住吉中学校、兵庫県立御影高等学校、東灘区役所、東灘、中央図書館などと連携している。

「再発見！<sup>うはら</sup>兎原住吉、昔を未来へ」のスローガンは特に子供たちを意識している。

住吉の良いところを知り楽しい暮らしに繋がればと思う。今の体制で十二年目にはいり、事業が町内近隣へ浸透してきた。古文書、絵図、古写真等が持ち込まれ、古老への聞き

取り記録とともに貴重な所蔵資料となっている。

現在の主要事業は、江戸期の豪商吉田家の文化事績を明らかにすること（国立歴史民俗博物館、神戸大学等、大学・機関との共同研究のお手伝い）。一九〇〇年代の住吉村・御影町の評価。当地は日本経済をリードした資本家・実業家・地主などが大邸宅を構えたところである。そして阪神淡路大震災の復興とその教訓の伝承などである。

それらの前に、だんじり祭の解明がある。これは別格で常にあるに思っている。

## 事業の特徴

旧兵庫県武庫郡住吉村は神戸市との合併に先立ち、村有山林等を基本財産として財団法人住吉学園を設立した。村を理想の住宅地にする夢があったのだ。住吉歴史資料館はこの住吉学園の設立であり、いわば、村立博物館のようなものである。

事業の特徴は、地元民の立場での実績の掘り起こしである。住吉生え抜きの事業推進委員がボランティアで行う。

但し、独善は禁物で神戸大学には中正・客観の全般指導を受けている。

海、山、川があるこの地で推進委員は小さいときから走り回り遊んだ。六甲南麓、通称水晶山での水晶探し、赤塚山ではアケビ取り。住吉川谷筋の水泳。夏でも冷たい水だった。高度成長期、原口忠次郎神戸市長の「山、海へいく」が始まる。ダンブが轟音を立てて住吉川河中道路や家のすぐ横の道を上下した。ダンブが途絶えることのなかった昼間、家はずっと地響きがしていた。かつての谷あいの静かな道はダンブ用に拡張され、住民はまるで開発現場の通路のような歩道をあてがわれた。雨が降ればすれ違えない。現在でも歩道はそのままだ。

阪神間の大動脈、国道四三号線が開通する。片側六車線、計十二車線で「車の洪水、轟音」という表現は大げさではなかった。国道の上は阪神高速神戸線が走る。

一九六〇年代は一日中家が揺れていた。山手も浜手もない。

埋め立てられた海岸、削られた山、一変したふるさとの景観。

「住吉川清流の道」とはいったい何だ、花崗岩質のキラキラ光る白い砂の道はどこへいった。住民が開発工事中ガマンしたことは何だったんだ。

今人気の住宅地東灘区の背後にはこんな事実が横たわっている。

事業推進委員はこの「ふるさとの激変」を肌で知っている最後の世代である。この視点を忘れずに生れ育った地元の住みよいまちづくりに貢献したい。

以下、そのような視点での事業作業の実際の具体例を二つご紹介する。

## だんじり祭の伝承

本住吉神社例大祭「住吉祭」でのだんじり引き出しは住吉の血肉である。

祭に関わる文書、経験、並びに聞き取りなど、幼少から祭に参加し運営にも携わった事業推進委員が調査し記録している。ここでは問題点を考えてみたい。

旧暦六月晦日（太陽暦八月上旬）の大祓祭にその淵源をもつ五月四日、五日の住吉祭では十二台のだんじりが引き出され皆が打ち興ずる。

四日は宵宮、氏子地区をだんじりがにぎやかに廻る「町引」<sup>ちやうびき</sup>を行う。

五日本宮は、御神体渡御・還御の後、神社の南約一キロあ

る御旅所にだんじりは集結し、午後七時より江戸末期に定められた順序に従って一台ずつ「宮入」する。

## だんじり祭の奉仕者

だんじりを引く人々を「若中」<sup>わかなか</sup>といい、その顔は輝いている。あたりまえだが、だんじりは人が動かす。力が合わないと動かない。

運行責任者は若中の長である帳頭<sup>ちやうがしら</sup>である。以下、副頭（副責任者）、会計が執行三役で魔除け七色の糸で編み上げたタスキを掛ける。

三役を助けるのは経験を積んだ世話人衆である。運行上の危険を予知して避け、けんかの仲裁をし、だんじりが他の町内に入るときは挨拶をし、祝儀の受け渡しをしたりする。運行の指令は全てウチワで行う。

実際にだんじりを動かすのは若い人々で、棒端方（ぼうばな。だんじりの前後に入り押す）、屋根方（立ち木の枝除けなど）、並びに「鳴り物（ナリモン）」ともいう囃子方（太鼓、半鐘、摺り鉦）を担当する。

小六まではだんじりの前に延びる「前綱」を引き、中学から若中衆である。まず後の棒端でだんじりを押し、センスにより前の棒端に入ったり、囃子方、或は屋根方に廻る。若中に出で立ちは腰巻、ジンベ、白地下足袋姿である。

経験を積むと世話人となり浴衣を着て麻裏草履を履くことが許される。やがて、ハレの帳頭指名が来る。

総勢で八〇名くらいはいる。

まかない方の女性を加えると一〇〇名は超す人たちが一台のだんじりを動かすため力を合わせる。女性がいなければだんじりは動かないのだ。

### 町引き、お囃子方

町引きは、だんじりを町内限なく引き、お囃子の太鼓、半鐘、摺り鉦の大きな音で悪霊・疫病を祓い、退散させてしまおうとするものと考えると理解しやすい。

囃子方の太鼓手は町内の坂道、狭い危険な道などを熟知しており、だんじりがそこを通過するときはお囃子の調子を変える。音の強弱、大小、テンポなど自在に操り引手を合力させ大きな馬力にする。登り坂などで引手が疲れていると感じたら、単調に力強くゆつくりとした打ち方に変える。

夜の巡行でも構わない。太鼓手は町引きルートを熟知しており外を吹く風の匂いで巡行中の位置がわかるし、水路が流れておれば、その水音でも場所がわかる。

囃子方は先輩から「オマエらは神さんの声を聞いて太鼓の打ち方を決め、だんじりを引きやすいようにするのが役目」

で「神さんがオマエに乗り移っているのだと思え」といわれるほどの重要な配置である。鳴り物は安全運行のかなめなのである。

### 祭礼を支える裏方女性

女性は、町内会館台所に陣取り、まかないを担当する。食事の基本メニューは決まっており、何日も前から下ごしらえが始まる。

家事の合間を縫って会館に集まり、メニュー担当を決め食材の買い物をする。毎回一〇〇名を超す昼食、夕食、そして休憩時の腹ごしらえ食など、食事が出来あがつていく様は壮観である。

名物「ふき」と「たけのこ」の煮しめ、握り飯に加え、サンドイッチ、とんかつ、鶏の唐揚げ、カレー、関東煮、イチゴなども出てくる。

まかない方の女性たちが祭礼の二日間、美しく飾り付けられただんじりを目にする機会は少なく、宵宮の町引きで、町内会館の前を通るときくらいである。

その時は、エプロン姿のまま会館玄関前に並び、通り過ぎるだんじりを拍手で見送る。

しかし、見逃さない。今年の帳頭の人望はどうか。うまく

引けているか。お囃子はちよつと下手だな、とか一瞬で見抜く。女性になめられると、まかないの味が変わる。

一方、屋根を見上げて、「あれはどこの子や」、「××さんところの下の子や」、「もう屋根に乗る歳になったんか。ええ若い衆になったもんやな。」「上の子は、前の棒端で引いとるわ」といった調子で、町内の子供たちの成長具合も把握する。

この間、一〇分もない。だんじりが去ってしまふと急いで台所に戻る。夕食の天ぷら揚げはまだやつと半分だ。

かつて女性は、だんじりに触れなかった。地元の娘さんは出たい、屋根に乗りたいたい気持ちを地団駄踏んで我慢し、まかない方に廻った。

嫁いできた奥さんは、まかない方で婦人会デビューである。「どこそこのお嫁さん」という言い方で品評がなされる。若い嫁たちも負けていない。嫁同士が横の連携をとり親睦を深め、主的ボスの弱点を共有して攻め、まかないの作業効率を保つ。

この雰囲気こそ町内の人たちの和であり、住みよいまちづくりの原点であると感じる。また、防災の大きなポテンシャルで、先の大震災では町内の地理を熟知していること、食事のまかないに慣れている事が復興にどれほど役立ったことか。

## だんじり祭の問題点

祭は年々、盛大になって来ているが実は変質してきている。神事面の大問題は、だんじりの宮入と町引きの順序が逆になっていることである。要は「お祓いのまつり」が成立してないのである。

昭和四十六年（一九七一）、だんじり引き出しを時代遅れと観念し神社境内に各地区のだんじりを集めた。ところが何と、昭和五十年（一九七五）、だんじり引き出しが復活した。しかし、だんじりはお宮にあつて地区には居らず、どうしても宮入が巡行の最後になってしまうのだ。

既に四十五年、若い人はこれが祭の形態だと思っている。

もつと深刻なのは参加する人が変わった点である。

地元の若者が減り、地縁のない愛好者間のネット呼びかけでの参加が増えてきている。楽しい祭にしないと引き手は集まらない。盛り上がって、感動させ、よし来年も、と思わせないといけない。

その結果、神事そつちのけのパフォーマンスが増えている。囃子方では、特に太鼓手の技量が低下し、巡行時の臨機応変、緩急自在の打ち分けがもうできなくなっている。

引手もお囃子を知らないので息が合わず疲れる。思わぬケ





写真1 野寄区だんじり 昭和10年5月12日宮入 左手は既に宮入の済んだ住吉仲区だんじり 近郷のベスト2だがいずれも戦災焼失

ガの危険は確実に増している。女子の参加も顔にケガでもさせたらと若中帳頭の悩みは深い。

まかない方も経験者が減って地元の「お嫁さん」は数えるほどである。新しいマンションに越して来たお母さん方も参

加してくれるが、おにぎりを握れないお母さんもいる。殆どのお母さんは子供が六年生を終えると、「子供の思い出づくり完了」と来なくなる。その中でも、残ってお世話をしてもいいという人を探すのである。

現在、漸くではあるがだんじりを各地区に戻し、五月四日を宵宮「宮入」、五日を本宮「渡御」、「町引」とする形に戻す動きの芽がある。若い人たちも奔走してくれており頼もしい。

だんじり祭の本来の姿はどのようなものか。神仏習合の痕跡などにも踏み込み、だんじりの起源、宮入神事の意味、お囃子の成立など地元の資料館ならではの説明を行いたい（写真1）。

### 大震災の復興と教訓の伝承

もう一つの活動事例として震災記憶の伝承を挙げたい。

防災対策は現在岐路にある。地域がしっかりとしているところは復興も効率的で速いなどと、よく言われる。東灘区住吉の二十五年前の復興は、自然環境とそとの暮らしぶりをともに、出来ることを出来る人がして行く方式であった。知恵・経験から来る必然的かつ自発的なものであった。



住吉歴史資料館発行の『阪神淡路大震災資料集 住吉の記憶 I～III』でまとめたが以下のような内容である。

断水下、水洗トイレを使えるようにした。

住吉川から町内に取り入れ南へ貫流するかつての農業用、水車用の水路を利用して避難所前まで水を引き込んだ。水路網についての住民の実践的な運用経験、知識が生かされた。併せ太平洋戦争中の空襲避難所で見た便所のひどい情景という歴史的な記憶があり、それは避けたいとの思いも後押しをした。

避難所での炊き出しを行った。

住吉町の各地区は毎年のだんじり引き出しで炊き出しをおこなう。町内会館にはそのための台所設備、食器があり、一〇〇名程度の炊き出しはいつでも可能である。婦人会には実施ノウハウの蓄積があり、それをそのまま生かした。

被災しても避難所へ入れず自宅で過ごした家族もいた。

井戸を現役で使っている家があり、食事時には、ご近所はここにきて共同で食事をした。日ごろの近所付き合い、人間関係をもとにした情報共有があり連帯した避難生活があった。

この資料集は、神戸大学の奥村弘、佐々木和子、水本有香、山崎善弘そして加藤明恵の各先生方のご指導とご執筆の賜物である。地元民にとつては何気ない知恵、処置が、地元ならではの最適な手法であることを先生方の強い指摘で気づかされ普通なら忘れ去られるものが記録として残すことができています。

これらの例は、地元ならではのものであるが、聞き取りに応じて頂いた住民の方々には当たり前すぎて、むしろおもしろいと一様に言われていた。

大災害がまた起こったら

さて、大災害が再来するといわれている。また被害を蒙ったとして地元の知恵を生かした復興が出来るのか。

現実には難しいと思わざるを得ない。

最大の問題点は、住んでいる人が変わってしまったことである。

東灘区人口二十一万の約七割は新来の人で地元の人は一割程度と言われる。そして毎年五月のだんじり祭を家庭の年中行事と感じている土着民となると二割にも満たないのではと感じる。

だんじり祭は地元の人たちが長年に亘り行ってきた。女性による炊き出しのノウハウを含めて土地勘・知恵経験が蓄積されてきた。

二十五年前の復興では、この人たちが、まるで祭を行うように復興の日々をこなしていった。言うまでもなくこの人たちが持つ実生活上、歴史上の経験・知恵が復興のベースであったのだ。

今、これを持つ人が極端に少なくなってきた。

身近な例では、『阪神淡路大震災資料集Ⅱ 住吉の記憶 住吉西区と阿彌陀寺』を発行し二年くらい経ったとき、資料集Ⅱに対する感想や補足を聞く座談会を打診したところ、町内会の元会長さんは「アンタらの大抵の要望はきけるが、それはもうムリだ、みんな散ってしまつて人は集められないのがホンマのところだ」といわれたことを覚えている。

東灘五月の風物詩「だんじり祭」も人が変わつてしまつて

いる。そもそも震災を知らない世代が、新来であろうと土着であろうと半分以上を占める。大災害が発生しても町内に災害経験を

### 新しい復興の手法

では、どうするか。

現実には区役所などに頼った最大公約数的な手法になると思う。

しかし乍ら、幸い、東灘区には旧町村が災害の教訓をまとめた記録類が存在する。

武庫郡住吉村発行の『昭和十三年大被害誌』並びに『住吉村誌』災害編、本山村には『本山村水禍録』がある。甲南学園には『阪神地方水害記念帳』がある。

併せ、住吉歴史資料館発行の『阪神淡路大震災資料集』のⅠ・Ⅲ、並びに、住吉の災害をまとめ、災害年表を付した『わたしたちの住吉』災害編がある。

これらは昭和十三年（一九三八）の大水害以来、甲南学園創立者平生鈇三郎の唱えた「常二備へヨ」を基本的な考え方として編纂されている。

災害経験のない新しい住民であっても、これらの冊子を防災専門家の知見を仰ぎつつ読めば、災害の歴史を知り、過去の大災害の地元としての対処法・知恵を知る事ができるのではないか。

災難に逢時節には災難に逢がよく候

加えて、古くて新しい視点を持ちたい。即ち、かつての日本人が持っていた「自然に生かされている」との考え方である。

災害は防げない。想定外のものが来れば堤防などひとまわりもない。

江戸期文政十一年（一八二八）、新潟の「三條地震」に際し良寛和尚は、その温和なイメージとは対照的な右の激越な言葉を被災した親友へ伝えている。

仏教の「諦める」は「無常の現実」を「明らかに観る」との意という。人知の限り防災対策した後は自然に委ねよう。誰もがいつか死ぬ。災害で死ぬのも現実である。堤防が低かったと嘆かず、越えて来た水を現実として観る。日々懸命に生きて来たなら達観できる。

実は右の各村の記録類の根底にある思想がこれであり、「常二備へヨ」に行きつく。平生飢三郎の真意は「常に死に備えよ」であろう（写真2）。

住吉歴史資料館では例年十一月の小中学生お茶会で災害の歴史を地道に伝えようとしている。自然に対する謙虚な考え方も紹介しつつ「常二備へヨ」を浸透させたい。

以上



写真2 甲南小学校校庭「常二備へヨ」石碑 水害5周年の昭和18年建立